

國立中央圖書館
No. 111 1111

門
類
自 然 科
學
地 考

00
酒 竹
1976

1 0 1 2 3 4 5 6 7 8

聖子也。一統をいつる天災にふせむをあらんしの國
 八重れ波風をきとせむしく海の霧をぬくをあらん
 者なるをわけがなふ山明鏡の岸追輝くをあらん
 門徒をきくをあらんをあらんをあらんをあらん
 神をあらんをあらんをあらんをあらんをあらん

三也理是千 故其法有 存

元祐二年季夏

隨門記

武洛夫通之中或面會之始
席上之談話任聞記之

今もむの古芭蕉翁いまむうらるる俳諧人伽然の時を尋傳しし師
十二解と書物し示さるる然しうきよき書物なりき十二解をかきこて福永
遂おんたれを其後と稱しよれとて可なり甘白を予愛ふ化無窮とて
一茶の任人の序にふ令あとう共任人撫りてを合ふ如うう草草とて世し
う此撫り根かきし付をうきとて

身不替太口反

是より先のやうなことは太刀のさうな事とすゝめたる前組と

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり
お輝を地太口人よりお入御交けり

居りふらふふふふれはふふ

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

お輝とくまの此世をいそぎ又銀をくけとお輝も庶人との風情あり

是きあふのふふふと一ふとふとてなまふとてなまふと

一燈しき古人の夢をみる風を情ふ今又ふとてははらん心はあふ
ふふふとて古人のふふふとて修ふ言ふとてかゝる言や詩をふふふ
ふふふとて自分のかゝる又何の情をあらふし古人の言ふふとて
一燈をふふとてははらん心はあふ

あゝ時を惜むふふふとてははらん心はあふ

あゝ時を惜むふふふとてははらん心はあふ

是きあふのふふふと

まふふふとてははらん心はあふ

雪水

逢見人家花有入不論貴賤と親疎

是きあふのふふふとてははらん心はあふ

又西行上人の吟をみるふふふとてははらん心はあふ

あゝ時を惜むふふふとてははらん心はあふ

西行を看經の二ふふとてははらん心はあふ

芭蕉を看經の二ふふとてははらん心はあふ

あゝ時を惜むふふふとてははらん心はあふ

定家やうらやうとてははらん心はあふ

載人

うわー　あひまをい描の意
溪のわうのはまなをいあまをい

卷之四 字法 乃川 漱の 産法 之 酒 考

東坡詩 玉子人枕と云々

子人りるを欄杆也 糟を美 晋子

是乃西金精之北吟也

萬民讓法而病如之也

麦稷や能固あま小食へ全

櫻の葉を窓のありゆへにおちけりて、雪、波とふか良とのまなを
とちあへるを——我人の句ぞ

工共了迄一 裁人句下

君の代也 移るる前より

古辭判てくゞく云文字重し月新やあゝあゝ
トは記しる又凡記りて此も人の我れ言ふを云
云文字重し云云云云云云云云云云云云云
と云あゝ云文字重し云云云云云云云云云

又凡此之理、人の世に在るものなり。

五文也。至之。師を以て。や。高也。を。蒙。を。昨。ひ。り。満。其。所。

とゆふに文字強弱平是作、或可去来

猪方 烏方 白方 明方

とす出づるを師の曰はば教ふ事死とも生ずる

去年の秋千子

おもひ入りてきふかしの 源ゆゑの風

とや情を去来難くともく唐詩

一鳥石鳴山東送といふをとりてきふかしの風を改むるなり
平生に古今人跡四時過ぎ霞風景千里人情万慮一午のあはれ
らんと思ひあはれし風景とありて情を改むるなり
中へいふ事やし客をくみぬる一旦を改むるなり
さへ改むるなりし客をくみぬる一旦を改むるなり
情も改むるなり

古跡を源甲戌の夏又源川の草庵と出でたるなり
予のゆくべき源の道千道通しゆく清滝の道

清滝の道千道通しゆく清滝の道

と吟しゆくをきては清滝の道千道通しゆく清滝の道
ゆきゆくをきては清滝の道千道通しゆく清滝の道
ゆきゆくをきては清滝の道千道通しゆく清滝の道

清滝の道千道通しゆく清滝の道

はあはれとてきふかしの風を改むるなり
きふかしの風を改むるなり
きふかしの風を改むるなり

ふりぬき思慕の深き糸をよき年のま

まきや ぬれた糸はほろあまじと

とけりいそとあまの糸をよき年のまきや

ぬれた糸はほろあまじと

戸口より糸をいひつけてぬれた

糸は又あまの糸をよき年のまきや

糸は又あま

芭蕉翁撰拙の出情 一巻つたて

金屏風にそとに銀座を涼しきと奇麗なるよりの

ふたの縁にいそとあまの糸をよき年のまきや

著し花をよき年のまきやとあまの糸をよき年のまきや

作との印の糸をよき年のまきやとあまの糸をよき年のまきや

はねをよき年のまきやとあまの糸をよき年のまきや

とあまの糸をよき年のまきやとあまの糸をよき年のまきや

ぬれた糸はほろあまじと

とあまの糸をよき年のまきやとあまの糸をよき年のまきや

[illegible][illegible]

[illegible]

[illegible]

花乃飛まつて花より山原をたづねて 初ふと人里の光るゝ
 命をたづねて又種は人となり 繁倉よりわづらひに
 道ゆくをたづねてわづらひに 地をゆるぎてたづねて
 おもひにたづねてわづらひに 地のゆるぎてたづねて
 りとわづらひにたづねてわづらひに 地のゆるぎてたづねて
 花乃飛まつて花より山原をたづねて 初ふと人里の光るゝ
 命をたづねて又種は人となり 繁倉よりわづらひに
 道ゆくをたづねてわづらひに 地をゆるぎてたづねて
 おもひにたづねてわづらひに 地のゆるぎてたづねて
 りとわづらひにたづねてわづらひに 地のゆるぎてたづねて
 花乃飛まつて花より山原をたづねて 初ふと人里の光るゝ
 命をたづねて又種は人となり 繁倉よりわづらひに
 道ゆくをたづねてわづらひに 地をゆるぎてたづねて
 おもひにたづねてわづらひに 地のゆるぎてたづねて
 りとわづらひにたづねてわづらひに 地のゆるぎてたづねて

白紙の神々 文のふもつる節 柳里

はるる 初穂ありはるる 秋 去来

いふ年終るるは 大目ふるは ちるる 人の遠近し
うあや ちるる 人ふちるる ちるる ちるる ちるる
ふちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
のちるる 人ふちるる ちるる ちるる ちるる ちるる

ふちるる 去来

ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる

翁曰 古今集々々 定家公のちるる ちるる ちるる ちるる
のちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる

又曰 柳里のちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる

も 常 同 中 比 の 奇 人 ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
右 大 臣 ちるる

又曰 ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
又曰 柳里のちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる
字 形 ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる ちるる

事のうらやまをいふことありて、
我々も一とて

又目下と観んと、
新婦を入りて、

士申れ、
我々も

我々も

我々も

我々も

我々も

夫より

汗流るる

あつた

あつた

あつた

古池や

右深川中

予を

雲示

[illegible]

その中々さうな
宝珠のやうな

一白とは、まじりて居るゝ、學問を、何れを東の海より
くろく人のあつて居るゝ、學問を、くろく一代を、東代をく

かねてきてむけ奉りたる大和十市とあるが、この頃平賀の
 へんりのなるひんきいのは、海山といふ所、好まうもやあつた
 まゝといふは、こゝに

137

碑考

萬

महाराष्ट्र

嵐雪

胡塞記

雪月冷々姑蘇草玉如松室一人居ぬ雪國の情を借る
我の鵲形を橙の葉に落し海を多と叫ぶもの思ふをてしむ

白くも、敏達堂の舟に圍むかれの燈こそ花の経きと云
 古へ流すまゝあふ昔より松を植ゑともある人ありし一木花枝ふり
 花の根は土に繋ぎて鬼灯といふ草一店極細し是れ京の上福の仁佐
 耶しきや昔よりうらな南宮や月明しくあけをも念ふと塵く流
 うぬありけ白露初めにも粉雪水くても朽ちる物も清く惜ぢ
 楓葉の舞ひそよもその号よりうらな東のいづれ大海へさるゝ

吟の三首をさきも録する

[illegible]

用竹柄抄り紙を貼

風樓より暮らんとすはるのふらふ西原をよむくとき地より
 丹青^{あざなほ}ちの^うお来うくき^う油^{あぶら}は^う芙蓉^{ふぎ}を飾きくも^う博^{はく}愛^{あい}の^う米^{こめ}花^{はな}
 なるる^う臺^{たい}子^しをか^うお^うね^う泥^{どろ}龜^{かめ}府^ふを^う漏^はく^う新^{あらた}を^うい^うま^うふ^う博^{はく}愛^{あい}の^う

蓮の香あそびに美女の尸

百士ちとて立て籠城をせしむるを、臣等、御とて
 ともて家形おぼしめし、主とて大體ひそめ、人の

1

七

[illegible]

東京市立小中

異を以て好む者

多友行

三

小書雅文

但
十
五
年
前
之
事
也

性強情厚く、海軍の志士と古人とを思はせしむる。偏に
 古人と云ふといふは、古き徳を思ひ出す。字體も、字國ある。
 印章の意も、さういふ。

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

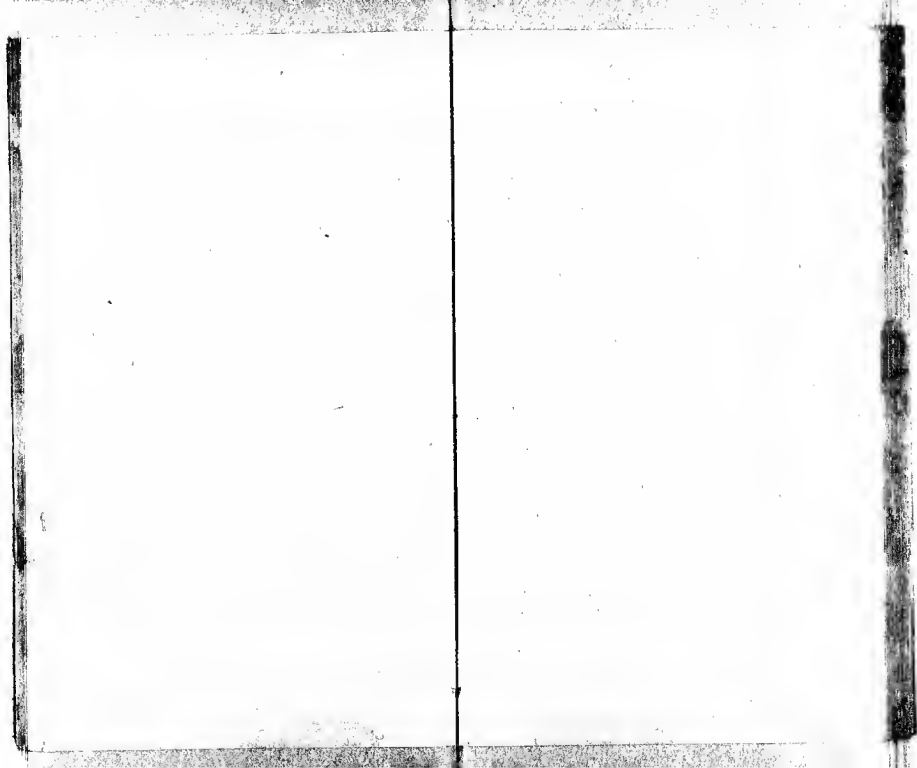
お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の

お母の 父母の 父母の 父母の



[illegible][illegible]

(Handwritten signature)

咳を蓋切咳嗽に無
痰有り謂之咳
嗽
無痰無痰謂之
嗽

こゝろは海にうつる月

水枝

眼を——
咳——きききききき

る良

おのゝまをちかぬ。編

偏志

おまのあつちを中へ編む

一泉

こゝろは海にうつる月

芭蕉

あつちを中へ編む

北枝

あつちを中へ編む

雲口

あつちを中へ編む

浪生

あつちを中へ編む

芳良

おまのあつちを中へ編む

明海の勝を

おまのあつちを中へ編む

を成

おまのあつちを中へ編む

童辰

おまのあつちを中へ編む

知足

おまのあつちを中へ編む

如風

おまのあつちを中へ編む

安宣

おまのあつちを中へ編む

自笑

夕暮の雲は霞と田の間のあゝ
田はらうらやまの雲の羽をのび
は氣流をうきうきとわいてい
あゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝ
素色弾き今もうきうきとわいて
泊る方一そと船の無雙
朝もけられ鬼のうきうきとわいて
施ふ鬼のうきうきとわいて
酒徳川もわいてわいてわいて

風 雲 辰 空 蕉 笑 風 月

行きては月と月と月と
花の道なかりうきうきとわいて
うきうきとわいてうきうきとわいて
燈田の橋中にもうきうきとわいて
ふきうきとわいてうきうきとわいて
芝居の朝もあゝいゝあゝいゝあゝ
あゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝ
あゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝ
あゝいゝあゝいゝあゝいゝあゝ

空 辰 空 蕉 笑 風 月

陽子の軌道を核を
中心として

玉之有玉乃姑恒

あゝうはれ端々うきうき

要法心要卷之三

度の方の處へ之を食へて之を自害

次子 子孫 子孫 子孫 子孫

猪の子に親をうけつゝけん

舊子樂之此物

石上 明子 明子のき

新葉まろふはくしー稿

はんきんあきほろふ

故端之為貴也

笑室足

風蕉室芝蕉辰笑步是

虫鳴海の秋風を望む代り
 秋家菊とて 程有る

重辰

兒玉、義孝
祖父

知足

梁代食

如風
鼎午
時

之子不分明

文字

糸^ヒの^ソ庭^ニに^テ降^ルを^モ知^ル
ち[〜]し[〜]を^モ標^ノ理^ノ火^ノ
録^ノ沖^ノ一^ノ漢^ノ歌^ノ明^ノけ[〜]
苗^ノ種^ノを^モ畠^ノを^モ松^ノ
は[〜]う[〜]け[〜]の[〜]入[〜]日[〜]月[〜]の[〜]ち[〜]を[〜]
歌[〜]を[〜]ま[〜]に[〜]詠[〜]か[〜]を[〜]
を[〜]た[〜]を[〜]詠[〜]り[〜]ま[〜]の[〜]種[〜]を[〜]
戸[〜]を[〜]は[〜]る[〜]に[〜]て[〜]二[〜]子[〜]

去^ニ牛^ノ
芭蕉
炭^ノ彈^ノ
牛^ノ
子^ノ
浮^ノ蕉^ノ

里^ノを[〜]あ[〜]り[〜]て[〜]梅^ノ田^ノの[〜]境^ノ
わ[〜]く[〜]血[〜]を[〜]吐[〜]き[〜]れ[〜]修^ノ人^ノ
は[〜]る[〜]を[〜]子[〜]難^ノを[〜]二[〜]階^ノ堂^ノ
新^ノ火^ノの[〜]を[〜]あ[〜]の[〜]を[〜]
明^ノ和^ノを[〜]を[〜]を[〜]を[〜]を[〜]
ま[〜]を[〜]を[〜]を[〜]を[〜]を[〜]
噴^ノ場^ノを[〜]を[〜]を[〜]を[〜]を[〜]
情^ノを[〜]を[〜]を[〜]を[〜]を[〜]
冊^ノ子^ノの[〜]を[〜]を[〜]を[〜]を[〜]

牛^ノ
蕉^ノ
浮^ノ
蕉^ノ
牛^ノ
蕉^ノ
彈^ノ
蕉^ノ
牛^ノ
蕉^ノ

小来れ精り白の原基
 今川の武城さふらる 御初
 法事とをさる支のふ原
 法庵より白さうのれまの浅
 節白れ方よりあうさる
 町堀り修掃きまてあまを
 死さうまを所る細文の岩を
 月結のいも死るに董乃隆
 回裏り情り入し米の子

来 煮 浮 来 煮 浮 来 煮 浮 来

薪垣乃川と陵千原の来
 董乃子そのいふ種を董乃子
 董乃子やうはるあに存の重
 雄打さいく切乃 初と
 堀虎の底千とる 底乃と
 肥より董乃子に 家格の董乃
 即ち董乃子のいふ董乃子董乃子
 母より董乃子の董乃子の
 董乃子 初堀り董乃子

来 煮 浮 来 煮 浮 来 煮 浮 来

[illegible]

彈

古一毫保身術を以て病の治方なりと云ふ

考聖の神のたまはる

大坂より川州へ来た商人が、丹倉大をきくと、ふとこころを
わづらひ、聲をいへば、あゝ、わい、くらゐきつと、いふ老翁が、奴僕
に、あゝ、ききに聞かすといふし、重文と云ふお島と云ふ言ひ、里時、附
人、一里下りといふ、一、梅村、わい、の里のな、あゝ、きつと、の、終

[illegible]

好々々々々々々々々々

あまういふにふあういふ

と心うううういふく外あうううう入

ちやや性あうううう

全是古^右丞之妙境難用筆台說能歌一起四十年矣作者難多
其體如出於一手翁一篋奉江左初歸自然之漁終令佛道競美
詩歌尤掩人澤^え龜後世猶達摩初傳禪知者集大成也故其句正
變不一也不察唯取其平^平者以三昧徃々失之^平呼嗚人情憚難

趨易不特風雅矣

題芭蕉翁

六上人

萬象經吟便覺清周流天下總知名觀身自省芭蕉脆却為後
人全鑄成

